

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第7回配本の第三巻「近世編」は、来年3月刊行予定です。今回は、その主な内容についてご紹介します。

## 近世編のあらまし

巻のタイトルにもなっている「近世」とは、織田信長・豊臣秀吉が着手し、徳川家康が完成させた時代を意味します。この時代は、永禄十一（一五六八）年、天下統一を目指した信長が上洛して以降、慶応三（一八六七）年に徳川慶喜が政権を朝廷に返上する大政奉還までの間、三〇〇年の長きにわたって続きました。幕府が江戸に置かれたことから、江戸時代とも称されます。本巻では、町内に伝わったばう大な古文書をもとに、近世の日野町域に生きた村人・町人の暮らしの営みや、領主支配の実態を明らかにします。

以下、各章ごとにその内容をご紹介します。

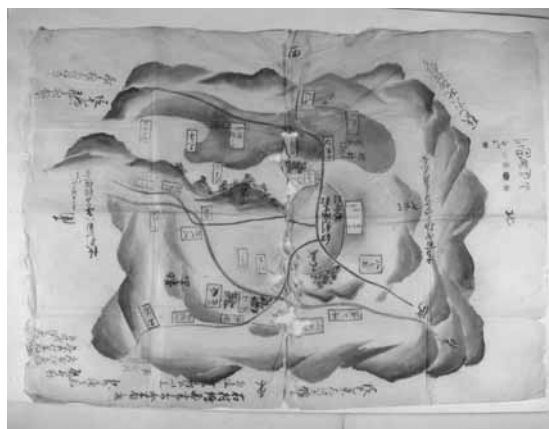
## 各章のおもな内容

第一章「日野の領主たち」では、近世の日野町域を支配した領主について取り上げます。当時の日野は、町域に陣屋を置いた仁正寺藩市橋家、旗本関氏のほか、彦根藩・水口藩・幕府領・旗本など、大小さまざまの領主が入り組みあつて存在していました。「隣村は違う殿様」という状況があちこちで見られたのです。本章では、代表的な領主の来歴や、支配の実態にせまります。

第二章「村と町の諸相」では、地域社会の基礎単位となった村・町の人びとの暮らしを取り上げます。近世の町域には、55の村・町が存在し、それぞれに集会所や郷蔵をもつ生活共同体として機能していました。それぞれの村・町では、庄屋をはじめとする村役人を村人たちの選挙で選び、村掟を制定して秩序の維持をはかるなど、

自治的な行政運営が展開されていきました。本章では、こうした村・町の自治活動の様相を明らかにするほか、寺院・神社を拠点とした近世の人びとの信仰生活について詳述します。

第三章「産業と交通」では、日野・売葉をはじめとする日野の地場産業に携わった商職人の活動や、農業生産の基盤となった山・



▲熊野村絵図



## 〈予約と販売のご案内〉

『近江日野の歴史』各巻の販売価格は4,000円（税込み）です。なお、「近世編」は、平成25年1月末日までに予約のお申し込みをいただくと3,800円の割引価格にて販売します。

また、最終巻が無料となる全巻セット購入も受け付けています。詳しくは、後日配布しますリーフレットをご覧ください。

水資源の利用と紛争の実態などについて詳述します。また、「御代参街道」に設けられた石原・鎌掛両宿場の様子や助郷の実態、通行者の様相について明らかにします。

第四章「文化の成熟と社会の変容」では、日野地域に花開いた学問や文芸活動の様相や民俗生活について詳述します。また、激動する幕末の日野の状況についても概観します。

付録CD-ROMには、本編で活用した貴重な古文書や色彩豊かな絵図の写真のほか、村別領主一覧表も収録する予定です。